2013 年１２月　7日（土）

第３回　遠藤周作とカトリック夙川教会
～ オペラ『沈黙』を中心に

講師　土居　豊（作家・文芸ソムリエ）

１．夙川と仁川、二つのカトリック教会

少年期に遠藤周作は、夙川カトリック教会で洗礼を受けている。その体験を、『黄色い人』では仁川の教会に舞台を変えて描いている。

遠藤周作が少年期の多感な時期を過ごした夙川近辺のことは、エッセイの中で何度も語られている。特に、夙川カトリック教会で洗礼を受けたことは、後々まで尾を引き、信仰の問題として遠藤の生涯のテーマとなっていく。

１）年譜より

1933 年（昭和 8 年）　父母の離婚により母に連れられて兄とともに日本に帰国し神戸市の六甲小学校に転校する。

1935 年（昭和 10 年）　私立灘中学校に入学。

4 月　母は宝塚市の小林聖心女子学院の音楽教師になり 5 月 29 日受洗。

6 月　周作も兄と共に西宮市の夙川カトリック教会で受洗。洗礼名ポール。

1940 年（昭和 15 年）　灘中学校卒業。

２）夙川、仁川 両教会ゆかりの小説

遠藤周作『白い人・黄色い人』

『黄色い人』あらすじ：仁川のカトリック教会近辺を舞台に、日本人と西洋人の罪意識の違いを焦点に据え、戦時下の人の心の荒廃を描いた作品。

※ 引用：遠藤周作『黄色い人』（新潮文庫）より

「ゲートルをはき雑嚢をもった関西学院の学生たちが、ぶらぶらと川岸をあるいていた。すべてが昨日の朝、一昨日の朝、半年前の朝と全くおなじような風景だった。私はまだ生きており、彼等日本人もまた生きている。だが私は神を拒みながら、その存在を否むことはできない。」

３）夙川教会ゆかりのエッセイ

※ 引用：遠藤周作『心のふるさと』（文春文庫）より

「私の人生に別の決定的な面を与えたのは西宮市内にある夙川に住んでいた時だった。夙川も今度の地震でかなり破壊されたようだが、そこの大きなカトリック教会は私が洗礼を受けた場所である。」

※ 引用：遠藤周作『落第坊主の履歴書』（文春文庫）より

「あまりに悪い子なので私は教会の主任司祭、メルシエ神父から大目玉をくった。メルシエ神父はフランス人で実に立派な人だった。戦争中、彼は何もしないのにスパイの嫌疑をかけられて憲兵隊につれていかれた。　（中略）
戦争が終って神父さんは痩せこけ、足を引きずりながら戻ってきた。教会における私の幼なじみたちの話によると、彼は、「日本人のことを私はウランでいません」と最初のミサでひとこと言ったきり、生涯、このいやな過去のことを二度と口に出さなかった。　（中略）

洗礼を受けた夙川の教会は一部分を除いて往事のままで残っている。祭壇も椅子も昔とはなんら変ってはいない。」

2．遠藤周作 終生のテーマであるカトリック信仰を描いた代表作『沈黙』

1）年譜より

1965 年（昭和 40 年）　新潮社の書き下ろし小説『沈黙』制作のための取材で、三浦朱門とともに長崎・平戸を数回旅行。

1966 年（昭和 41 年）3 月　『沈黙』を刊行。

10 月　『沈黙』で第 2 回谷崎潤一郎賞を受賞。

1972 年（昭和 47 年）　遠藤周作作品が欧米で翻訳され始める。この年には『海と毒薬』がイギリスで、『沈黙』がオランダ、スウェーデン、スペイン、ノルウェー、フランス、ポーランドで翻訳出版された。

1991 年（平成 3 年）　ジョン・キャロル大学の名誉博士号を受けるため、アメリカに旅行。その後、マーティン・スコセッシと『沈黙』の映画化について話し合い、同月帰国。

1996 年（平成 8 年）4 月　腎臓病治療のため、慶應義塾大学病院に入院。

9 月 29 日　肺炎による呼吸不全で死去。

※ ノーベル文学賞候補について

『沈黙』をはじめとする多くの作品は、欧米で翻訳され高い評価を受けた。グレアム・グリーンの熱烈な支持が知られ、ノーベル文学賞候補と目されたが、『沈黙』のテーマ・結論が選考委員の一部に嫌われ、『スキャンダル』がポルノ扱いされたことがダメ押しとなり、受賞を逃したと言われる。

2）小説『沈黙』について

1966 年に書き下ろされ、新潮社から出版された。江戸時代初期のキリシタン弾圧の渦中に置かれたポルトガル人の司祭を通じて、神と信仰の意義を命題に描いた。第 2 回谷崎潤一郎賞受賞作。この小説で遠藤が到達した「弱者の神」「同伴者イエス」という考えは、その後の『死海のほとり』『侍』『深い河』といった小説で繰り返し描かれる主題となった。世界中で 13 カ国語に翻訳され、グレアム・グリーンをして「遠藤は 20 世紀のキリスト教文学で最も重要な作家である」と言わしめたのを始め、戦後日本文学の代表作として高く評価される。

※ あらすじ

島原の乱が収束して間もないころ、イエズス会の高名な神学者であるクリストヴァン・フェレイラが、布教に赴いた日本での苛酷な弾圧に屈して、棄教したという報せがローマにもたらされた。

フェレイラの弟子セバスチャン・ロドリゴとフランシス・ガルペは日本に潜入すべくマカオに立寄り、そこで軟弱な日本人キチジローと出会う。

キチジローの案内で五島列島に潜入したロドリゴは隠れキリシタンたちに歓迎されるが、やがて長崎奉行所に追われる身となる。

逃亡するロドリゴはやがてキチジローの裏切りで密告され、捕らえられる。

神の栄光に満ちた殉教を期待して牢につながれたロドリゴは、彼を悩ませていたいびきのような声が、拷問されている信者の声であることを知る。自分の信仰を守るのか、自らの棄教という犠牲によって、イエスの教えに従い苦しむ人々を救うべきなのか、究極のジレンマを突きつけられたロドリゴは、ついに踏絵を踏むことを受け入れる。

※ 映画化

『沈黙 ＳＩＬＥＮＣＥ』

1971 年に篠田正浩監督により、『沈黙 ＳＩＬＥＮＣＥ』の題名で映画化された。遠藤周作は篠田正浩と共同で脚本を担当しているが、ロドリゴの棄教に至る経緯などは大幅な改変が加えられている。

主なキャスト　ロドリゴ：デイビッド・ランプソン
ガルペ：ダン・ケニー
キチジロー：マコ岩松
菊：岩下志麻
丸山の女：三田佳子
井上筑後守：岡田英次
フェレイラ：丹波哲郎

※ ハリウッド制作予定の映画

『最後の誘惑』『タクシードライバー』のマーティン・スコセッシ監督が長年映画化構想を練っており、一時はキャスト等も発表されていたが、制作は難航している。

ロドリゴにはアンドリュー・ガーフィールドが決定しており、他に日本人俳優としては渡辺謙、イッセー尾形らも出演予定である。

３．遠藤周作『沈黙』のオペラ化

作曲家、松村禎三が遠藤周作の歴史小説『沈黙』を題材として作曲、台本も松村自身が手掛けている。日生劇場開場 30 周年記念事業、平成 5 年度文化庁芸術活動特別推進事業の一環として、1993 年 11 月 4 日、日生劇場において、若杉弘指揮、鈴木敬介の演出により初演された。

※ 松村禎三（まつむら ていぞう、1929 年 1 月 15 日 － 2007 年 8 月 6 日）

京都市出身。1949 年、旧制第三高等学校理科卒。伊福部昭並びに池内友次郎に師事。1955 年に《序奏と協奏的アレグロ》が第 24 回 NHK 毎日音楽コンクール管弦楽部門で 1 位に入賞、デビュー作となる。サントリー音楽財団委嘱による遠藤周作の小説に基づくオペラ《沈黙》の作者としても知られ、それにより数々の賞を受賞している。ラヴェルとストラヴィンスキー、それからアジアの伝統音楽の影響を受けた力強い作風が彼の作品の特徴である。

※ 映画音楽も多数作曲している。

熊井啓監督作品　忍ぶ川（1972 年）海と毒薬（1986 年）千利休 本覺坊遺文（1989 年）
ひかりごけ（1992 年）深い河（1995 年）など

黒木和雄監督作品　竜馬暗殺（1974 年）美しい夏キリシマ（2003 年）
父と暮らせば（2004 年）紙屋悦子の青春（2006 年）など

その他　暗室（1983 年、浦山桐郎監督）夢千代日記（1985 年、浦山桐郎監督）
時代屋の女房２（1985 年、長尾啓司監督）
ダウンタウン・ヒーローズ（1988 年、山田洋次監督）
眠れる美女（1995 年、横山博人監督）ラブ・レター（1998 年、森崎東監督）など

４．オペラ『沈黙』２００５年公演記録

2005 年 9 月　新国立劇場地域招聘公演　ザ･カレッジ･オペラハウス「沈黙」
原作：遠藤周作　台本・作曲：松村禎三
中劇場２回公演　2005 年 9 月 16 日（金）6:30、18 日（日）2:00
指揮：山下一史　演出：中村敬一　美術：増田寿子　照明：椴木 実　衣装：半田悦子
音響：小野隆浩　舞台監督：菅原多敢弘　合唱指揮：本山秀毅
＜キャスト＞ ロドリゴ：小餅谷哲男 ヴァリニャーノ：新川和孝 フェレイラ：井原秀人
キチジロー：枡 貴志 モキチ：松本薫平 オハル：石橋栄実
おまつ：野間直子 井上筑後守：田中 勉 通辞：青木耕平 少年：寺内智子
じさま：松森 治 老人：西尾岳史 チョウキチ：安川忠之
役人・番人・牢番・刑吏：雁木　悟 合唱：ザ・カレッジ・オペラハウス合唱団
児童合唱：ころぽっくる合唱団 管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団
（大阪公演：10 月 24 日、26 日各日 6:30～　ザ・カレッジ・オペラハウスにて）

※指揮者・山下一史氏ショートインタビューより

Ｑ ：稽古の状況は如何でしょうか。

山下：日本のオペラ作品は、公演の機会が少ないのでレパートリーになりにくいのが現状です。暗譜で歌うだけでも大変なのです。海外の作品と比較して、役をレパートリーにすることが、とても難しいのです。新国立劇場の地域招聘公演として、ザ・カレッジ・オペラハウスのレパートリーから現代・日本作品であるこのオペラを公演します。この作品は、松村禎三先生が１３年の歳月を費やされて作曲されたオペラです。稽古を積めば積むほど作曲家の想いを感じます。

Ｑ ：原作は遠藤周作氏の「沈黙」、キリシタン弾圧のお話です。

山下：遠藤周作さんはこの原作で、苦しい殉教をした人は聖人に列し、後は切り捨てるという教会の態度に対して疑問を投げかけました。私はクリスチャンなのですが、キリスト教は「人間は、罪深いところから出発している」としています。拷問にかけられて、耐え切れずに踏絵を踏んだ人間は弱い信仰、耐えて踏まなかった人間は強い信仰、と神は峻別なさったのでしょうか。人間の親でさえ出来のよい子も悪い子も愛します。ましてや神は等しく我々を愛して下さっているに違いないのです。